

令和7年度 泉大津市立図書館協議会

■第1回会議の議事概要

日 時：令和7年6月2日（月）午後6時00分～午後7時45分

場 所：泉大津市立図書館オープンセミナースペース

出 席：嶋田会長、阿児委員、岡本委員、澤谷委員、高島委員、高橋委員、谷合委員
竹内教育長、鍋谷教育委員会事務局長、中山生涯学習課長、川真田生涯学習推進係長

公開の有無：公開

議 事

- （１）図書館評価について
- （２）持続可能な図書館運営について

議事

- （１）図書館評価について

議事概要

事務局より 2024 年度図書館評価について説明

(説明に使用した年次報告書と活動報告は図書館ホームページ)

嶋田委員：私から 2 点伺いたい。1 点目は、ARG との連携事業「デジタル資源カード」の説明で、「公共図書館の課題も見つかった気がする」との言葉があったが、具体的にどういうことであったのか。2 点目は視察に来られる方は、ビジネス支援サービスとこどもの居場所づくりという 2 つのポイントを示されたが、繰り返し来られる方があるとのことだが、その方々の狙いや、なぜもう一度来たいのかという深堀の内容が聞きたい。

事務局：デジタル資源カードについては、泉大津市立図書館は棚が低いので、棚の上に乗せることや、棚に目一杯、本を詰めないようにしているので間に入れることができている。しかし、既存館では棚にばんばんに本を入れているところが多いので、なかなかカードを書架に埋め込んでいく、本と同じようにデジタル資源に触れていただくのが難しいという声をよく聞く。また、多くの図書館がスマホの利用を制限しているので、スマホを出しただけで注意されたという声も聞くので、中にいる人たちのそういった意識改革というところが課題と思っている。視察については、議員視察が先にあり、これはぜひ見ておくべきだと、地元に戻ってから公共図書館や教育委員会の方に言われて見に来られるパターン。公共図書

館の方が、話題なので見に来て、自治体職員や議員へ見て欲しいという声があって来たという、どちらのパターンもある。本当に図書館を作ろうとされているところは、行政職員も議員も複数回視察の申し込みがある。

阿児委員：調べる学習コンクールは、最初は図書館振興財団からシーブラの職員、学校司書と自走できる形になったとされていたが、自走といってもすべて学校司書に任せるといった形にはならないと考える。やはり、連携を取り続けていくと思うが、自走の在り方のようなものは今回の受け渡しにあたって、どのようなことが決断の決め手になったのかを聞かせて欲しい。

事務局：昨年度、最初の校長会で「図書館で事業を行うので学校に手を挙げてください」と伝えたところ、すぐに学校から依頼があった。今回はその声掛けをしたときに、学校司書から自分たちでやってみたい、との声があった。しかし阿児委員が言われるように、学校で丸ごとできるわけではない。テーマを絞りたいとの相談に対して、学校の資料だけでは不十分なので、シーブラで揃えることができますかという相談や、授業には至っていないがそれまでのやり取りを学校支援チームで行っている。

澤谷委員：報告書を見て、講師の名前をクリックすると経歴やどんな事業をされたかを見ることができれば、それがデータベースになる、と昨年オーダーしたのが実現していることに感動している。報告書も毎年バージョンアップされていて、その前年に見せてもらった報告書に対して、こうしてほしいといった要望が絶対実現されている信頼感と、それを続けているのがいい。

高島委員：内容について非常に充実していると毎年感じており、様々な実績が網羅され、図書館の幅広い取り組みを改めて実感している。一方で、報告書という性質上仕方ないのかもしれないが、昨年に引き続いて、報告書全体が数字や事業の羅列が中心となっている印象がある。私自身は開館当初からここに参加し、図書館の取り組みなども自分なりに理解しているので、今年は力を入れられたところや広がったところがよくわかるが、市民やこの報告書を初めて見る方にとっては、やはりこの図書館が何を大事にしているのか、どんな思いでこの一年を図書館が取り組んできたのかは、冒頭で館長が話したことだとは思いますが、なかなかこの報告書だけでは一見しただけでは伝わりづらいのではないかと。昨年も冒頭に館長の思いや未来像、ビジョンなどを入れてもらおうと、より一層伝わるのではないかとお伝えしたが、改めてもう一度検討いただきたい。この図書館は本を提供するだけでなく、すごく多彩なサービスを提供しており、多様なニーズに応えている図書館だと思うが、多様になればなるほど反発も難しいと感じる。そういったときに、図書館の思いやビジョンを示すことによってそれが伝われば、多様な図書館として進んでいくことができるのではないかと。

岡本委員：今の話を受けて、見ているとこの 2 年ぐらいでページ数がかなり増えた。確かにそろそろ、概要版のような 1~2 枚頭出しのスライドがあるとありがたく感じる。それだけの時間を積み重ねてきたということであろう。改めて拝見したときに、阿児委員も来られているが、このレベルのセミナーを継続できていることを、もっと回数だけでなく質的に評価したほうがいい。申し訳ないが、規模の小さな泉大津レベルの自治体でやるにはものすごいレベルである。そこらの私学でできている内容ではない。明らかに、20 万都市である岸和田市でやっているのであれば納得はするが、この規模の自治体で呼べるレベルではない。冷静に見て凄すぎる。年間にこのクラスの講師だと、普通の図書館であれば一人呼ぶのが精一杯だろう。これを毎月できていることに意味を感じる。なぜ、それを今日思ったのかというと、セミナーの開催頻度やデータベースの活用方法とうまく絡めているのが重要である。単に文化講演会があるから人が来る、という形より、そこで得た刺激を基に市民が自学自習し、自分の勉強をする Self-Learner になり、3 週間という貸出期間が有効に効いているのであれば、なおさら意味がある。また勉強に来る、という学びのサイクルがちゃんとできあがってきているのがかなり大きい。この講師陣の顔ぶれが効いているのであれば、これを実現するためにも是非維持して欲しい。評価的に難しいところだと思うが、近隣自治体と比べた評価をすべきである。正直、やったほうがいい。これだけでできているのは相当なことで、大阪府下で見て、この頻度でこのクオリティの講師を呼ぶことができるのではないと考える。謝金をいくら出されるかは知らないが、これだけのものをやると普通は大変である。そういったことも評価のポイントに入れていい。正直、自治体の範囲内なので、たくさんの謝金を支払えるものではないと思うが、それでもやってくださっているのだとしたら、言わばその分を稼いでいるわけである。一般的に講師として招く場合、最低 3 万円。できれば 5 万円ぐらいにプラス旅費と考えるので、一本あたり 10 万円ぐらいが民間感覚の企画費である。それが恐らく自治体、あるいは図書館だから、とやってくださる方が多いのだろうが、先生方には恐縮だが、その差額がどのくらいかをきちんと出したほうがいい。これはいやらしい話に見えるが結構重要なことで、例えば神奈川県立川崎図書館は社史などの資料をたくさん持っていて、それを金額換算している。基本的に神奈川県立図書館は社史を買わずに寄贈されている。しかし、仮にそれを買ったらいくらになるかというと、億円を超える寄贈を受けていて、実は億円分稼いでいる。歳入的にはめちゃくちゃ大きな話になっていて、一度神奈川県立図書館が危機だったときも改めて注目された。コストがかかっているように見えているが、これを失ったら逆に 1 億円以上の減収をするということが、議員にもかなりショックだったこともあるが、そのような観点で評価をしていいのではないか。高島委員の話を依拠して言うならば、最初にそういったことを強く書いてもいいのではないか。こうやっていることによって、どのような経済的なインパクトをもたらされているかということを、そこはかとなくではなく明確に主張してもいいのではないか。

谷合委員：3年前、なかなかビジネス支援でデータベースの利用頻度が上がらないことや、せっかくの専門紙をあまり見ている人がいないことを杞憂して心配事を言っていたが、今回かなり頑張っていたことが分かってとても嬉しい。ビジネス支援担当が頑張ったんだと思う。特定のデータベースがすごく人気があるとのことで利用率を見ているが、市町村立の図書館でこんなに有料のデータベースを揃えているところはないのではないのか。大学図書館でもこんなに持っていないところがあるので、先ほど岡本委員も言われたように、これだけのことができているというのはどこに秘密があるのか聞きたいくらい素晴らしい。

高橋委員：学校的には調べる学習コンクールである。中学校はなかなか子どもが参加していないが、図書室で調べることは日常である。ただ調べて発表する、調べて置いておくのではなく、著者をしっかり書き込むことやイラストに落とし込む技術を学んだうえで、形をしっかり残して授業で作ったものを、今回参加できたらと考えている。

嶋田委員：年次報告書の21ページに2024年度報告及び達成率ということで、達成率が整理されている。数字や文字のことを高島委員が言われていたが、達成率を見て他の図書館でも厳しいところ、谷合委員からも指摘のあったレファレンス件数など頑張っていると感じた。達成率の評価がA評価になるには130%以上とかなり高い設定である。Bは70~129%ということだが、B評価では辛いのではないかという気もするが、頑張っているのが数字のうえでも理解できた。

事務局：昨年の高島委員からの意見を基に、2023年度報告書の隣にA4サイズ1枚にまとめた活動報告書を載せている。今年度も冒頭で説明した活動報告を圧縮して付け加える予定である。また、ホームページに飛んだほうがいいという意見と共に、写真やチラシのデータも付けたほうがいいとの意見もいただいたが、現在準備はしているものの数が多いすぎるためまだ追いついていない。もう少ししたらできるのでお待ちいただきたい。

阿児委員：データ集をダウンロードできるようExcelで出しているのは、ぜひ続けていただきたい。1年目の分だけでは大学や研究者には、まだなかなか使いづらいかもしいないが、2年目、さらに3年4年と溜まっていくと、貴重なデータになってくる。これが使われるには時間がかかることだと思うが、やはりこの取り組みは続けていただきたいし、こういうデータがあるからこそいろいろな分析が、我々委員や市民、全国の図書館について研究している人たちの貴重な資料、データになってくる。1年ですらこのようなデータは他にないのに、シープラには2年分あるのは大きなメリットである。

澤谷委員：できればライセンスを書かれると、もっと使いやすくなる。

谷合委員：それで言うならオープンデータ化が進んでいるので、OPAC から検索してヒットさせることは可能なのか。今は国立国会図書館など、図書のデータだけでなくオープンデータでデータもダウンロードできる形でデジタルコレクションを出している。シーブラで無理ならNDLにやってもらうなどできないのか。すごく使えるデータであり、先進的なので、ここに来るたびに感動している。

岡本委員：A 評価が 130%以上などは、どこで決められているものなのか。感覚からすると、130%以上というのは通常 S 評価である。私が以前勤務していたヤフー株式会社はそんな感じだった。あれぐらいの IT 企業でも 130%はべらぼうな数字である。10 年在籍して 2 回ぐらいしか取ったことがない。この A 評価の設定は高すぎるのと、逆に B 評価は緩すぎる気がしている。これでは、成績がこけてもすごく良くても B にしかならない。C や D は無難である。A と B の基準を見直したほうがいいと感じるのと、貸出点数が全国的に明らかに低減傾向に入ったというのが、この 2、3 年明確に言われていることであり、もはや 1 館単位の努力の問題ではなくなっている。明らかに転換期にきていると業界的にはかなり共通認識になっているので、このあたりのトレンドをどう反映していくかは、ちょっと柔軟に見なければ難しいのではないか。

(2) 持続可能な図書館運営について

議事概要

会長のリクエストにより職員の任期について一覧にしたスライドを投影

中山生涯学習課長：持続可能な図書館の在り方という形で事前にこういった話をするなど聞いていなかったの、図書館の在り方やそういう部分については今後考えていかないとはいけないと思うが、オープンな場で全く元々出ていなかった話で、どのように進めていくのかというところもある。人の在り方の話になるのかと考えるので、それはまた状況を見て話をすべきところでやるべきではないか。

阿児委員：今の話にもあったように、持続可能というのは非常に難しい言葉である。持続するというのは、今の事業を持続することよりも、やはり市民にとって図書館の在り方を考え続けていく、サービスというものをどのようにしていくかを考え続ける体制であるとする。年次報告書にもあったように、職員がもう一度その年度の分析をして、今年の方角性と成果を自分たちで次の年に見直して、それが 130%になったりビジネス支援ができたりなど考え続けられる体制という意味で捉えているが、この言葉だけだと難しい。シーブラがどのような形を持続可能として設定するかには、まずそこが必要なのではないか。博物

館の立場からすると、博物館もずっと同じものを展示しているわけではない。常設展と言われるが、常に同じものが出ているわけではない。その時々に応じてテーマを設定して、社会の状況や何が求められているかをきちんと考えられる組織体制であるようにしている。ずっと同じものを展示して足を運んでもらうこと、維持できることは持続とは言わない。持続可能な図書館運営というところをもう少し固めていかなければならない。議論をどの方向にどう分割していくかも必要ではないか。他の委員からも、様々な意味での持続可能について意見を出していくのがいいのではないか。私としては、持続可能とは考え続けられる組織。先ほど行ったことをきちんとまとめて分析して、自分たちでどういうことを行っていくか。次のステップを考え続けられる図書館運営というのが持続可能を意味しているのかと思い、それに対してどういうことを検討しないといけないか、我々はどのようなものを協議会の場で協議しないといけないかという課題を持っておきたい。

高島委員：私自身は財政や人員のことについて全くわからないので、利用者として市民目線で話をさせていただく。シーブラでいろいろな大きなセミナーなどイベントが行われており、それが報告書からも伝わり、普段利用している市民としても非常に実感している。岡本委員から「これが普通と思わないほうがいい、すごいことである」とあったように、改めてすごく新しい図書館だという認識はあるが、このような取り組みがシーブラでできているのは、図書館長がこれまで様々な経験の中で築いてきた人的なネットワークや、経験値や企画力が大きく貢献しているのではないかと推察している。その一方で、持続可能という点では懸念している部分もあり、現在のイベントの多くは図書館が市民に提供するサービスという形になっており、それが館長個人の尽力によるものであれば、将来的に館長が交代したときに、シーブラのサービスの質や方向性が変わってしまうのではないか。それは市民にとってすごく戸惑いもあるし、良いことではないと感じる。図書館が提供しているサービスとは別に、図書館と市民が協働して支える新たな仕組みを今のうちから少しずつ整えていくことも必要なのではないか。それが、持続可能という点で大事なのではないかと考える。様々な本に関わる活動をしている団体も泉大津にあるので、そういったところを巻き込んで、図書館がサービスするのとは別に、市民が企画して図書館と協力して運営していくことで、市民も図書館に自分たちが関わっているということがあれば、より愛着がわき、地域の人々が実際に図書館に関わり続けられる、そういった思いが持続可能という面においては大事なのではないか。

岡本委員：阿児委員が言われたように、それぞれが考える持続可能とはどういうことなのかを考えたほうがいいのではないか。私は時間が経った後、かつて有名だった何かの跡地のようなになるのは嫌である。正直、公共施設はある話だと考える。この仕事を始めて、すごく有名だと聞いて視察に行ってみたら驚くこともあり、行政サービスの持続性というのは本当に難しい。10年を超えるあたりから、道が分かれてくる。そこをどう持続するかというの

が重要と考えている。特にこどもたちの成長を考えたときに、今ここに来ている高校生たちが、10年もすればこどもを連れてここに来るようになる。そのときに、お父さんお母さんが楽しくここで過ごしたことを伝えたときに見る世界が、ぺんぺん草が生えているとまずい。それはここに限らず、シーバスパークや市内の様々な公共施設において、どこも課題である。それをどのようにしていくかは、今出たような市民と共に支え合うような団体的な活動、いわゆる市民協働の活動はしっかり仕込まないといけない重要な点である。ただこれは、大阪府内においては、全体的に見ると少し低調かと感じる。都市部では、全般的に市民協働は低調になりやすいところがあるが、そこに飲み込まれずに、せっかく泉大津なんだからという泉大津のスタンダードをしっかり作りたい。大阪の全部が駄目なわけではなく、がんばってやっているところもあるけれど、ただ全般的に言うとも30年前ぐらいに凄かったところが、今はけっこう落ち目になってきている。持続性とはそんなものなのか、とも思うが、人の一生ぐらいの長さでたじろぐようでは、持続性とは言えないと考えるので、やはりわたしたちの現役期間ぐらいの長さを超えていくような持続性をどう設計できるかは、しっかりこの場で考えていきたい。

高橋委員：今の小学生や中学生が、また行きたいと日常的に思ってもらえるような仕組みがあればいい。

谷合委員：持続可能ということで言うと、私の胸が痛い。エル・ライブラリーのように小さなところは、なかなか世代を継いで持続することが難しい。このような公共の図書館であれば、人が変わっても代が替わってもおそらく同質のサービスは続けていけるだろうと思うが、岡本委員が言われたように、実は今はそうでもないというようなことを聞くと、このシーブラがいろいろな先進的な取り組みをすればするほど、どうやってこれを持続させていくのだろうと、案じられる部分でもある。このシステムを作るために、まずは人である。人をどのように育てて確保して、次の世代を育てるか。職員が生きがいを持って楽しく働けるところでなければ、この図書館に来る人たちも楽しめないのではないかという気がする。安心して働ける環境、そしてサービスを受ける市民が消費者マインドになるのではなく、高島委員が言われたように一緒に作っていくというマインドでやっていけるシステムをどのように考えればいいのか。なかなかうまく思いつかないが、どう作っていくかを考えるのがこういう場だと考える。

澤谷委員：私は大阪市の図書館で管理職をしているので、今は自分の部下や同じグループにたくさんの職員がおり、これまで自分が勤めてきたなかで、いろいろな先輩から聞いた話を後輩たちに伝えていきたい、と常々思っている。私たちが考えている図書館の在り方をうまく伝えることによって、私たちがしたかったこと、先輩たちがしたかったことをうまく繋いでいくことを考えているので、図書館の建物があり、市民が来館して、いろいろなサービス

を一緒に行っていくのも大事だが、図書館の職員間でやはり思想や市民サービスへの思いを継いでいくような何かしらの仕掛けはいるのではないか。それが行政の責任と考えるので、それをどのような形で行っていくかが大事である。イベントを続けるだけでなく、図書館が図書館であり続けるということをどう考えていくか。それができれば、こどもたちが大人になっても安心して使っていけるのではないか。

嶋田委員：皆さんも触れていたが、私の個人的な意見を言うと、人のことが一番気になっている。先ほど中山生涯学習課長から、このような議論をすることは聞いていないし、どうなのかという疑念を掛けておられたが、まず公表されているデータが一つ含まれている。今回の年次報告書 25 ページに館長・副館長・職員の任期と人数が書かれている。そして公募があり、任期替えがあったと聞いた。任期の有る無しは泉大津市の人事担当が考えることであり、協議会で人事体制全体に意見を言うつもりではないが、次も 5 年とっていたがそうではなかったことは、2025 年度には公表される情報である。私自身は属人的な話ではなく、社会教育の根幹的な事業を行う責任者を含めて、やはり疑問を持っている。図書館の持続的な運営という観点でご配向いただきたい。あくまで個人的な要望であり、協議会としての総意ではないが、そういった公表されている事実とこれから公表されるだろう情報に基づいて重要なことだと考えた。私も公務員も図書館長も経験したが、もしあと 5 年で図書館を盛り立ててくれ、と言われ、5 年経ってそれなりに評価されるようになった先に、またあと数年となれば、もし自分の立場だったとすると非常に苦しい。私は働く者として、また図書館という重要な施設を預かる公務員、専門家として、そのことをこの協議会で言うておかなければ、協議会委員として、また会長としての責任を果たせないと考えたので、唐突に聞こえたかもしれないし、この協議会の任を超えているのではないかという批判はあるかもしれないが、この 4 年間活動を拝見してきて、切実に思うことであった。もし行き過ぎているところがあればお叱りを受けるし、お詫びもしたいと思う。

中山生涯学習課長：今後の在り方というものを考えていかないと駄目だというふうに思っているが、現時点でいきなりだったので言わせてもらったが、そういった意味で言えば、今日も実は会議 3 つ目で、真ん中の会議が社会教育委員会議という、上位のいわゆる生涯学習全体を考える会議があった。そこで今年度と来年度の 2 年間かけて、生涯学習推進計画を作り直し、また文化芸術振興計画も作っていくという話があった。「キミと、よみドキっ！」こどもの読書活動推進計画も令和 8 年までという形になっているので、今後の計画も、もちろん市民を入れた形でワークショップも行いながら、じっくりどういうふうな在り方、生涯学習の在り方があるのかを考えていくことになる。図書館も当然そういったところには入ってくると考えている。

竹内教育長：一つ質問だが、先ほど言われた評価項目は館長が全部決めたものなのか？ そ

れとも協議会の委員で決めていったのか？

事務局：先ほどの項目は開館前の時点で、評価されるだろう数字と ABC の部分も館長が作成した。協議会はその後にできたので、これでいいのかを毎年確認している。

竹内教育長：高島委員から先ほど市民目線で、という話があったが、私も図書館が好きである。けれどもヘビーユーザーではない。教育委員会の立場でこの図書館を作るまでのプロセスにも関わって、本当に大変な中で苦しい思いだったし、局長も当時課長だったので大変だったと思う。そのような中でやっと出来た図書館で、先ほど文章で評価をという話が出ていたが、今風の言葉でいくと、こども家庭庁の 18 歳未満までの対象のこどもたちの放課後の居場所づくりの一つである。そのような必要なこどもたちのバックボーンと本当に勉強しに来ているこどもたちとが入り乱れ、特に受験前になると、言葉は悪いが、図書館にいと居場所が必要なバックボーンのこどもたちの民度が上がってくる。例えば、わーっと騒いでいるこどもたちを目線で追ったときに、横に首を振るだけで静かになる。泉大津地元のこどもたちがそのようになること自体、長いこと教師をやっているとすごいことである。受験を控えているこどもたちが、ほんとに真面目に一生懸命勉強している姿を見て、自分たちもこのままではよくないことを気づいている子もたくさん出てきている。だから、評価で言うと、私にとってはそれが一番である。難しいいろんな数字や言葉が出ていたが、専門的な言葉というのは消化できていない。ここに来ていつも見るのはそういう子たちを見て、持続可能という部分もそのようなこどもたちが大人になって、また図書館で自分が変わったことなどを話してもらえたら嬉しい。評価の部分でそういったことも書いて欲しいのが本音である。

澤谷委員：では、この評価の中に教育長ポイントを入れるなど、教育長が評価をすればいいのではないかと。我々公務員は内部の評価をなかなか受けることがない。本当はすごくいいことをして、会話のなかでは褒められることはあるが、教育長からの評価があるのは市民にとってもすごく大きい。教育長に限らず他の部局からも言ってもらえると、図書館職員もやる気も漲るのではないかと。

谷合委員：今教育長が言われたことは、まさにこのストーリーによる質的評価の試みにぴったりのので、もう 1 ページ増やして欲しい。今言われたことは、私たちも日々ここに来られるわけではなく、地元のことをそこまで知っているわけでもないのに、聞いていて響いた。すごくいい言葉を聞くことができた。

岡本委員：評価の話はそこをしっかりと踏み込んだほうがいい。まさに量的評価と質的評価の問題である。これほど量的評価に偏って、果たして誰の得になるかということは、これまでここで議論になってきた。質的評価は重要であると考えます。自分自身の記憶で言うと、義

務教育課程で唯一覚えている評価はまさに量的評価で、中学 2 年生のときに先生が書いてくれた言葉は今でも忘れない。どういうことかは省くが、それは私にとってすごく重要でその後大きく影響している。やはりそこは教育行政なので、どういう価値を示すかを問われていると考える。もちろん量的評価も重要である。それは健康診断の数字のようなもので、数時を取っておくのは大事であるが、総合的に見てどうえるのか、ということを経理長からも話していただきたいし、できれば今回は協議会委員で書いたが、これは市民に書いてもらうのいいのではないか。ここに来ているこどもたちはどう捉えているのか。もう一つはここに来てくれないこどもたち、ここは私たちの居場所ではないと思っている子はもう少し辛辣に見ていると思う。それも含めて受け止めたほうがいい。今年度やっていくこととして、もっと包括的であり、且つ包摂的な評価の仕組みづくりを議論する論点になるのではないか。このあたりは学校の児童・生徒はどうだろうか。

高橋委員：小津中学校の生徒はがんがん言うと思う。ちょっと話は変わるが、持続可能ということで最近小津中学校も話題に出る。いろいろなところで発表をしたり、視察の方たちと喋っていると、小津中学校は今すごく先進的なことをやっていて、すごくいい学校になっているが、校長が変わったり、中心で頑張っている先生が転勤したら、これは続くのか？とよく聞かれる。私の答えは「続きます」と明確である。それはなぜかというと、2 年前にこどもから意見が出て、同じことをこどもが考えた。校長先生や先生がいなくなったら、このままいけるのか。だからこそ私たちは、学校のコンパスという学校が進んでいく方向を作る。それに向かって皆でやっていけば、別に校長先生がいなくなっても大丈夫ではないかということで、こどもたちは学校のコンパスを作り出した。それをブラッシュアップしながら、今 3 年目になり、学校のコンパスの中心になる考え方自体が、こども自身が学校運営に参画するということである。普通学校はこどもが学校運営に参画はしないが、こどもの考えを充分汲み取ったり、こどもがこういう方向に向かいたい、卒業時にこんな人になりたいという思いを本当に学校の中心に据えて、それを私たちは目標として達成できるように手助けするというスタイルである。これをやっていくとこどもの声が絶えず学校運営に反映されながら、こどもの願いを叶えていく学校ということで、私や中心の生徒がいなくなっても回っていくのだろう。もちろん現場としては、回していく先生の育成は常にやっている。ただ、それをやっても小津中学校が良くなるだけである。小津中学校の壮大な計画は、研究開発学校というちょっと特殊な立場にあるので、小津中学校でやっているこどもが学校運営に参画することを文科省が次の教育課程で全国に蒔くといい。それが今、私が考えていることである。これをやれば、うちの学校はどうなる、など考えなくても全国の学校がいい方向に向かっていくだろう。図書館にも関連するのではないか。

鍋谷局長：今は頭の中でまとまっていらないが、生涯学習課長が一番最初に言った言葉は、私も同じことを正直思っていた。館が立ち上がるときに、やはり今このようになっているのは

館長の力が大きく、泉大津にとっても特別な予算と特別な人の体制という、今までできなかったことを可能にしているところもある。ただ、それはやはり教育長も言われたように泉大津市にとって特別な図書館を作りたい思いで、持続可能な予算を取れるかといえは今は私の口からは言えないところもある。いろいろと考えていくうえで、市と市民にとって、この図書館はどうなったらいいのか。市民も子どもたちと高齢者は、考え方は全然違う。正直、ビジネス支援が一番必要なのか、そうではなく使いやすさが一番必要なのか。いろいろ関わっている人の意見を広く聞いていく必要があるのではないかと、改めて感じた。少なくとも今、シーブラは泉大津市の中でも一番の施設になっていると思うし、これを継続していく必要があると思っているが、一概に今のままでこのまま行きます、とは宣言できないのが本音である。

川真田生涯学習係長：まだ 4 月に赴任したばかりで、正直なところ詳しいところまで現状がわからないといったところで、皆さんが真摯に図書館の課題・問題を検討されていることを知った。図書館は知識の入り口として、興味を持っている方が更に知識を得るための足掛かりとなる図書館、利用者の促進について皆さんがいろいろな観点から考えていることがとてもよくわかった。一重にここに来られている審議員の皆さんの尽力による結果だと考える。

嶋田委員：こどもから高齢者まで、仕事や暮らしを支える、健康に関する情報など図書館には様々な情報提供があるが、運営をしながら、満遍なくサービスができていて、そのフィードバックも手応えがあるのか、または、実は攻めてはいるが反応が弱い、或いは十分に攻められていないなどあるのか、館長に率直に伺いたい。

事務局：教育長が言われたように、今日もオープンセミナースペースの周りには中高生がたくさんいて、放課後や土日祝日になると、スタンディング席にもびっしりと子どもたちがいる。勉強しているかと言えばそうではなく、ゲームをしたり皆でスマホをいじったり、皆で一つの YouTube の画面を見ていたりという姿もあるので、視察の方たちからもよく言われるが、他の公共図書館に比べて中高生・大学生ぐらいまでの若い世代がとても利用が多い。このような空間を作りながら自分でも驚きだが、もっと本当は近づきたい。中高生をターゲットにしたようなセミナーなどいろいろな取り組みを打っていきたいが、やはり近づこうとすると離れていくので、中高生に向けてこちらが届けたい情報をどのように届けるかが、なかなか次の一歩ができていない。ビジネス支援サービスに関しては、多くの図書館がやっていると言いながら踏み込んだサービスはできにくい部分だと思うが、「ここに来れば法律の情報を調べるのに D1-Law を利用できる」、「東商信用録が揃っているので図書館に来る」というお客様などが出てきているので、ビジネス支援サービスについては図書館が頼りになることをもっと発信し続けなければいけない。もちろん、どの質問に応えられるように、

図書館側も最新の情報にアップデートするところも重要である。

嶋田委員：1980年代の前半の頃に、神戸市立図書館の伊藤昭治という著名な図書館員がその頃からビジネス関係資料をたくさん揃えていたが、なかなか利用されなかった。それは決して悪いことではないが、やはり図書館がこどもや親子連れに利用してもらうような家庭の楽しみのための読書にあまりにも注目がされていて、いわゆる現役世代の働き手の人たちに充分に使ってもらえていない。開館時間の問題や様々な他の要因もあるが、認知されていないことが問題ということで、ビジネスライブラリーというフロアを作ろうかと論文にはなっているが、神戸市に於いてさえ実現していない。今は多少展開しているが、80年代、90年代はそういう時代ではなかった。先ほど、いろいろな方の利用があるということだったが、公共図書館はオープンすると家族連れやこども、高齢者の利用も多いので、言葉は悪いがそこは放っておいても来てくれる。高齢者にはアクティブシニアという観点で居場所をつくるという案が公共図書館でも新たに組み込まれているが、一番利用の薄かった層にリーチできているということは高く評価すべきである。もしかしたら、力が入りすぎている、ウェイトが乗りすぎているのではないかとイベントの一覧を見て思われるかもしれないが、先ほど誰に評価するかということも話があったので、ぜひそういったイベント参加者がどう見ているのか、とりわけビジネスユーズについて、今まで公共図書館でそれほど取り組まれていなかったのものでそのあたりを聞いてみたかった。

岡本委員：持続可能という話を考えていくうえで、私はやはり論じれる人を少し増やしたほうがいいと考える。以前、静岡県の土肥さんということも家庭庁の委員もやっている若者に講演に来ていただくなどしたが、もっとこどもや若者に対しての主体的な意見を出してもらう。今はこども基本法的には意見聴取という言い方をしているが、あまり好ましいことではない。我々の都合でこどもの意見を聞くのではなく、こども自身が自己決定としてどうしていきたいか、という話をもっと聞いていく必要がある。これは決して、シーブラが今までできていなかったというより、ようやくそういったことができるところまで来た、ということだと考える。まだ何も固まっていないところでいきなり皆の意見を聞こうとしても、それはそれで空振りに終わるし、残酷な話をすると聞いたこどもはこれができる頃には大人になっているので、今が聞くにふさわしい時期になったきたのではないかな。だから今年度以降、そこをしっかり調べていったほうがいいのではないかな。こどもたちは今後どうしていきたいのか。これは実は私も仕事をしていて今熱いテーマだと思っていて、自治体から図書館運営の話であると同時に、こどもの居場所づくりの話でもあるクロスされている相談を受けることが多い。確かにその場として図書館というのが想起されるようになったのは、なかなか進歩だと思う一方で、なんでも図書館でやるというのも違うだろう。恐らく私も答えるときに、結局は自治体ごとのケース・バイ・ケースのことであり、こどもたちにとって本当にここが来やすい場所なのかを考えなければ、大人目線でわたしたちの都合よく思っていな

いか、ということもあるので、そういったことをもっとヒアリングを重ねたり、対応の場を作るのができるといい。同時にそれは持続可能性の点で言うと、そろそろいずれ協議会の委員も部分的に変わっていく必要がある。私は私の座をあげても構わないので、ぜひ泉大津の未成年に入っていただきたい。私は今まで何度かそういう取り組みをしているが、未成年は残念ながら我々より優秀である。これは私たちが誇るべきことで、いつもそういうことを言うややムツとされる方には、私たちが作ってきた社会で育った若者が私たちより優秀であるというのは、私たちの優秀さの証明でもあると言っている。そう信じたい。鳶が鷹を生む、ということではなくて、私たちが優秀でそうしてきたから、もっともっと優秀な若者が生まれてくるだけの話であり、そういう若者たちを信頼してまず協議会にオブザーバーでもいい。できればその内から一人でも委員として迎えるような形で、泉大津のことを決めていくとなるのが望ましい。その中から、例えば市民グループのような形で話し合いをしていく、こどもたちのグループと話し合っていくなどしていくのは、この持続性を考えるうえで、まずはしていくことができると思うがいかがだろうか。

阿児委員：岡本委員の話を聞いて、高橋委員の言われたことも同じだと考える。どんどん加わっていく。また、コンセプトは同じだが、構成する人々、例えば学校であれば先生と生徒の関わりなどは有期的なものなので、コンセプトは一緒だが形としてはどんどん変わっていく。シーブラも常に頭に出しているコンセプトがあるが、コンセプトに基づきつつも、どのように図書館運営をしていくか、シーブラはどうあって、どう活動をやっているか。どんどん形は変わっていく。岡本委員も言われたように、協議会の委員としても形が変わっていくことではないか。それはやはり、シーブラの持続可能というのは停滞ではなく、成長しているわけである。その成長に合わせた人的な体制や協議会の体制や市民との関わり方、泉大津市の中における位置づけがすごく大事である。シーブラの位置づけは立ち上げ前の段階と、立ち上がった時と、今では異なってきている。それも含んでいかなければ、我々も感じ取れない。図書館の協議員だけだとシーブラのコンセプトはわかるが、泉大津市としてシーブラはどのように位置づけられているのか。今後シーブラをどのような市民に活用してもらいたいのか、どういうサービス拠点となっていくのかは、どうしても我々には見えづらいこともある。そういうところも含んでいくのが今日の話でも出たように、生涯学習計画の中でも関わってくると考えるので、どんどんいい意味での新陳代謝が行えて、大きくなっていく。こどもたちが大人になるようにシーブラもどんどん大きくなっていくと考えるので、成長過程を見せていく。自分たちでこのように成長していくところを見せていくといい。また、すごく個人的なことだが、私は博物館で勤務しているが何故図書館協議会に入っているのか考えたが、最初は ORIAM digital history の立ち上げのときに、私もデジタルアーカイブをやっていたので声をかけられた。しかし、今はすごく成長している。立ち上がって、活用されて、コンテンツも増えて、学校教育に活用されている、となれば私はもう放牧状態である。私から見ると、デジタルアーカイブとしては、私よりもう少しふさわしい人がいるの

ではないかと感じている。しかし、ずっと応援はしたいので、どんどん応援団を増やしていく。いい意味でのOB・OGを増やしていく。さらに新しい人が入ってくる形で、いい意味での新陳代謝が生まれるようになるのも持続可能として一つあるのではないか。ただ単に成長目標がなく、変わっていくだけでは意味がない。そことのバランスなのではないか。

高島委員：多くの人がシーブラに関する議論に参加していくことで、持続可能な図書館も見えてくるのではないか、という話もあったと思うが、一つ感じたのは、泉大津市には今、まちぐるみ図書館プロジェクトがある。シーブラを中核として泉大津の中にある図書に関する場所や活動団体が、街全体を大きな図書館と見立てるプロジェクトで、私も関わっている。去年の活動から見ていると、どうしてもシーブラと各まちぐるみ図書館団体と大きく分断されており、シーブラと協働して何かを行うことは実際できていない。これは市民活動なので市民が中心になってやって欲しいと行政の思惑でやっている話かもしれないが、まちぐるみ図書館に関わっている者としては、個々の活動は個人がやっていても、それを皆でまちぐるみ図書館でこの街をどう考えよう、という熱量にははっきり言ってなっていない。なので、市民でやって欲しいと投げられてもなかなか全員の熱量をそこまで上げるのは難しく、ビジョンも立てられない。去年は講演会を行ったが、やはり図書館に関わってもらえたら、という思いがすごくあった。そのように入口が図書館だけでなく、地域の本に関わる拠点、例えば小学校であれば子どもと保護者の声も拾うことができ、図書館に関わるいろんな入口を作るという意味で、まちぐるみ図書館は有効だと考えているが、市民に投げられてもどう動いていいのかわからないので、図書館と協働したほうがやりやすい。

嶋田委員：旧自治省がやっていたコミュニティ政策で、地域の人々がミニライブラリーを行うのと社会教育の図書館とは、高島委員の指摘のようにどちらからも寄って行かない没交渉であった。一つの提案として、市民による図書館について語り合うフォーラムのようなものを行うのはどうか。平田オリザ氏や片山義博氏など少し著名なゲストスピーカーを招き、図書館についての基調の後にまちぐるみ図書館に関わる人にも来てもらって話をする時間を設けて繋がりを作ってはどうか。

竹内教育長：まちぐるみ図書館とは少し違うが、私がこの仕事をしていて、行政は国の省庁によって、志は同じなのに違う攻め方をしなければならないという非常に苦しいところがある。小学校で地域開放を定期的に行っているが、こどもの居場所づくりをメインとして図書館開放をしている。関わってくれる人には10年以上継続してくれている人もいて、こどものためにと考えてやっているが、手伝いをしてくれる人たちは皆本好きで、まちぐるみ図書館のベースにあるのではないかと考えているが、なかなかリンクしていかない苦しさがある。省庁が違くと方向性が違って非常に苦しいものがあるので、まちぐるみ図書館を何とかしなければいけないと館長が一番感じているが、行政サイドとしては非常に難しい。市民

とお互い協力して引き出しながらやっていくことができればいいが、利活用やいろいろな場所に本を置くことを含めて、徐々に広がっているのも、もう少し時間がかかるのではないかと感じている。

澤谷委員：一般的に図書館は人に頼るのが下手というか、自分で完結しようとしてしまっている。もしかしたら日本人の気質かもしれないが、まちぐるみ図書館の人ももっと厚かましく頼ればいいし、図書館ももっと厚かましく突っ込んでいけばいいのにと感じる。

嶋田委員：本日は、昨年度の図書館の実績について全員から評価をいただいた。また協議会委員にストーリーによる質的評価も一つにまとめた。協議会委員から市民に向けて議論をしてきた。その責任に於いて、泉大津市立図書館の活動を我々は拝見し、認識をしているということを、公表してもらえものになるよう館長と相談しながら議論を進めてきた。教育委員会でもご一読いただき、公表の方法や時期を相談している。持続可能な図書館運営は非常に抽象的だったので、冒頭私からお願いしたような形で職員の皆さんの状況にも触れてもらった。教育委員会の皆さんからも意見をもらい、特に教育長からは本質的なシーブラの価値について、教育長の最も琴線に触れることについて語られたのは大きな成果であった。ぜひ可能であれば、教育長の視点を市民にも知っていただく機会になればいい。

谷合委員：Library of the Year 2024 の優秀賞を取ったのは素晴らしくめでたいことである。もっと大きな声で言っているのではないかと。開館 3 年で取ったのはすごいことである。このように評価をされている図書館というのは、それなりに注目を浴びて、続けていくのは大変であるが、我々も微力ながら頑張っていく。

高橋委員：学校教育と密接に関わる場所なので、益々校長会でも利用促進を図りたい。私は中学校からの視点なので、一度小学校の先生や小津中学校の生徒にも来てもらうのもいいのではないかと。

高島委員：シーブラが出来てから、市外の方からシーブラのことを聞かれたり案内したり、誇りになるような図書館運営をされていることがありがたい。

嶋田委員：今日シーブラに来て、ethos（エートス）という言葉が浮かんだ。ethos には雰囲気や文化的度合いという意味がある。教育長も触れていたが、ここには「〇〇してはいけない」と一切書いてないが、来館者が皆心地よく過ごせるよう、こどもたちや高齢者がシーブラの振る舞いをごく自然にしていることに静かに感動している。

澤谷委員：今日職場で回覧物を見ていたら、雑誌「市政」5 月号に泉大津市長の対談が載っ

ていて、そこでもシーブラが出てきている。こういうところで市長に自慢してもらえる図書館は素晴らしいと感じるし、図書館協議会に教育委員会からも出席して真剣に話ができる場は本当に羨ましい。

岡本委員：今日触れた ABC 評価についてはきちんと見直してはどうか。2021 年度からずっと見ていたが、ABC の基準は 2023 年度から明記されているが、いずれにしても最初に指標を決めるのは重要だが、指標が適切でないということにならないよう、どこかで見返したほうがいい。今年 5 年目になるので、今年はこのままでよいが、今年やってみたうえで、次年度から新しいものさしに変えたほうがいい。新しいものさしに変えたうえで、そのものさしで過去の分ももう一度評価し直して、評価の流れが途絶えないようにしたうえで変えるほうがいい。また、年次報告書にどこから視察に来ているかが書かれているのは非常にいい。ぜひ続けていただきたい。これがちゃんとできている自治体はほとんどない。これは後々すごく重要でいろいろな自治体の新築や構想を読んでいると、どこを見ているのかがわかる。おそらくこの先シーブラを前提にしている計画が出てくるだろう。これはすごく重要なことで、民間の空き施設に図書館を移設する例が多くある。それには明らかに 2 つの流れがある。とりあえず空いたから仕方なく市が買い取って入れる最悪のパターンで 5 年から 10 年で破綻する。対してかなり真剣に考えているケースがあり、できれば真剣に考えているケースがシーブラから始まるのが最も評価として重要な点になってくる。他の都市政策に対して強い影響を与えるという明確な効果がある。都市経営がシーブラ、さらに引いて言えば泉大津の都市経営が非常に優れた前例になっているのは、参照される先として泉大津が全国で想起されるようになるのは極めて重要でぜひこの発表は続けていただきたい。

阿児委員：今日たまたま手に取ったのがこども政策課の「きっと子育てしたくなる」というパンフレットだった。シーブラのことも、まちぐるみ図書館のことも書かれており、教育長から話があった放課後の学習支援や居場所があることが書かれている。こういったところに載ってくるのは、「キミと、よみドキっ！」で泉大津市のそれぞれの課が同じ目標に向かってやっているのを見せた成果ではないか。こういうのが生まれるのはすごくいいことである。こども政策課は「キミと、よみドキっ！」のなかでも、「こどもが読みやすい多様な資料の収集及び提供」と書かれていて、それが実現している。それを意識して市民へ、さらに泉大津市で子育てをしていこうと考える方たちに対してパンフレットが作られているのはすごく大きなことであり、こどもの読書活動推進計画が実現した一つの形ではないか。図書館の「キミと、よみドキっ！」があって、これは市として計画したものであり、それが逆に市の他の課に影響を与えていったのか。それによって泉大津市が「キミと、よみドキっ！」をきっかけにして、より取り組みに対して変わっていったのかは、こどもの読書活動推進計画の一つの成果である。このような事例も集めるとより市民に伝わり、泉大津市がどのよう

な方向を目指しているのかを、より知ってもらえるのではないか。計画を立てるときにやり取りをしたのだから、各課でもどう変わったかをヒアリングしてもらえると嬉しい。

終了 19：45